ミシェル・セールにおける第三項 tiers 概念
－初期思想の読解を通じて

縣由衣子

1．　序論

本論文の目的は、ミシェル・セールにおける第三項(tiers)の概念及びその排除の問題について、セールの最初期の論考から検討を行うことである。

セールの膨大かつ多岐にわたる思想の展開を特定の主題の元に横断的に読解する試みは、先行研究においても未だ十分になされているとは言えない状況にある。本論文は、セール思想を横断的に理解しうる一つの主題として第三項の排除及び包摂の主題がある、という仮説のもと、セールの最初期の論考である『ヘルメス』第 1 巻『コミュニケーション』所収の「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的生成(« Le dialogue platonicien et la genèse intersubjective de l'abstraction »)」からその問題系の根幹とその後の展開の予告を見ることを試みる。すでにこの論考ではっきりと定義されている第三項排除の論理とは、コミュニケーションの成立とは、対話する二者が協働してそれを妨害する第三者を排除しようとすることと同時的なものであり、これを必要条件とするというものであるが、これは単なるコミュニケーション理論としてのみ理解されるべきではない。また、この論考においては 1980 年代以降のセール思想の展開についての予告的な要素を見て取る事ができると言えるのである。

その上で、本論文は、第三項概念におけるこの論考の重要性をその出版背景と先行研究の検討を通して確認する。その後に、論考の読解を通じて、セールがコミュニケーションの観点から第三項の排除の問題を提起したのち、相互主観的な真理と抽象数学を関連付けながらこの第三項の論理をそこに読み込んでいることを確認する。最終的には、結論として、「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的生成」においては第三項の排除の論理の導入を通じて、観念論と経験的なものの逆説的な接続が指摘されることになる。

2．　問題提起と問題の背景

ミシェル・セールの思想においては、常に妨害物の問題が様々に形を変えて散見

される。初期のネットワークとコミュニケーションの構築の問題に関しては、ノイズや誤記がそれを妨げるものとして登場し、あるいは理性を撹乱する〈悪魔〉の存在が言及される。さらに、1980 年代に至ると、関係に寄生するものとしての寄食者の問題が『パラジット』[1]において登場し、また『ローマ』[2]においては都市という共同体を撹乱する共同体の構成員ではないジョーカーの存在や、あるいは共同体の成立の基礎をなしている権力者がシステム内の異質物として重要視される。また、『五感』[3]においては感覚与件や身体感覚が客観的な観念に干渉するものとして論じられることになる。本論文の根本的な問題意識は、これらの妨害物一般を第三項の排除と包摂の問題のヴァリエーションとして横断的に捉える事ができるのではないか、という仮説のもとに端を発しているということができる。

その上で、妨害する第三項と、その排除あるいは包摂という問題は、セールの思想の中で極めて初期から提唱されているものの一つと言える。本論文で取り上げる論文は、『ヘルメス』第 1 巻でそれぞれ異なる雑誌に投稿された論文を集めた論文集『コミュニケーション』[4]において、第 1 章の「数学」の元に納められた 3 本の論文の中の 1 本「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的形成」[5]である。本論文で、第三項概念を論じる上で、この論文を取り上げるのは次のような理由においてである。

2.1 初出の問題

あまり指摘されることのない点だが、この「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的生成」を始めとする『コミュニケーション』内の諸論文の大半において、初出の表題からの改題が行われている。とはいえ、初出とは比較的連関が残されたまま改題が行われた他論文の表題[6]と比しても、本論文で言及している「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的形成」の改題は根本的なものだということができる。この論文は 1966 年に刊行された *Les études philosophiques* が初出だが、その際の題名は、「第三者、あるいは第三項排除(« Le troisième homme ou le tiers exclu »)」であった[7]。実際のところ、『コミュニケーション』でこの論文を初めて読んだものは面食らわされることになるのであって、というのも、論文がプラトンの対話法に言及するのは論文の後半に至ってのことなのである。ではこの論文で主題とされていることはなんなのであろうか。それはコミュニケーションに関する第三項の排除の問題に他ならない。このごく短い論文は、そのような主題のもとに執筆されたものとして考えると非常に良く理解されるのである。

この論文が発表されたのが 1966 年だということを再考してみると、セールにおい

てはこの第三者の問題はすでに非常に初期の頃から意識されていたものと考えて間違いがないだろう[8]。

以上の点から、本論文では「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的形成」を扱うのであるが、その上で、第三項概念に関する先行研究について検討しておきたい。

2.2 先行研究について

セールにおける第三項の排除あるいは包摂についての問題を論じている先行研究は明確なものはまだ少ないと言える。その中でも、第三項に関して主題的に論じられている論文としては、ブラウン[9]及びハラリ＆ベルを上げることができる。中でもハラリ＆ベルは「多声の航海日誌」[10]において第三項とノイズ、そして奇食者を関係付けることを試みている。その中でハラリ＆ベルはセールの哲学の目的とは、「コミュニケーションの全域的なネットワークの全ての要素を同定すること」[11]であるとしていて、その上で、「世界の始まり、いやむしろ、始まりという概念そのものが循環の中におけるコードによるネットワークの確立と同時的なものであること」[12]を示そうとしている、ということを指摘している。そして、このコミュニケーション、すなわち情報の伝達が成立するということに関して、「一方では、正確な情報の伝達は、雑音の存在を必要とする。というのも、メッセージの意味はバックグラウンド・ノイズに対してのみ形成されるものだからだ。もう一方で、情報の伝達は、それが含む必要のあるまさに当該のもの、つまりバックグラウンド・ノイズの完璧な排除をも要求する」[13]というジレンマがあることから、「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的形成」を引用しつつ、「メッセージとノイズの差を決定するためには一に対峙する二の連合がいつもなければならないのであり、この第三の存在がノイズ及びコミュニケーションの成功の原因となる」ことが明らかになる。そこで、ハラリ＆ベルは、この論理と『パラジット』が不可分のものであることに言及していて、これが『パラジット』ではなく『〈悪魔〉あるいは第三の人間』であるべきだったのではないか、という疑問を呈してもいる。ハラリ＆ベルは、ただコミュニケーションにおけるノイズやシステムに寄生する寄食者（パラジット）を妨害する不適当なものとして一義的に理解することは、これらの一見した邪魔者たちがシステムの不可欠な一部分なのだという事実を見落としているとする。つまり、セールにおいては、システムは「混乱を経験し、その後に、それを統合することによって」[14]より複雑な段階に移行することを可能にするのであって、第三項を最終的には「システムが可能である条件」[15]を形作るものとして理解しようとしていると指摘

するのである。従って、ハラリ＆ベルによれば、「秩序の内部から無秩序の優位を立証し」、「無秩序を介してさらに複雑な秩序を生み出す」[16]ための因子として寄食者、第三項、あるいはノイズは機能していることになる。

ハラリ＆ベルの分析は、戦略的に分散化されたセールの概念をコミュニケーションのシステムにおける妨害者の排除と包摂という形で取りまとめている点において、非常に貴重なものである。しかしながら、1982 年に発表されたこの論文におけるハラリ＆ベルの言及は、『パラジット』までのセールの思想に対する部分的な分析にとどまっており、それ以降の著作に関する言及はなされていない。従って、ハラリ＆ベルの論文で言及されている著作以降、特に『ローマ』『五感』において展開される議論における第三項の問題については分析は未だ十分なものとは言えないだろう。では、実際のところ、このハラリ＆ベルの言及以降のセールの思想における第三項概念の展開として指摘すべき点とは何か。

それは、端的に言えば、システムに内在する視点からのこの第三項もしくは排除の問題だということができる。言い換えれば、1980 年までのセールの分析は、第三項の超越論的分析だと述べることができるのであって、それは、一見邪魔者であるはずの第三項が根本的にはシステムには寄与するものとすることによって、第三項の排除と包摂を含み込んだ動的なシステム論の構築を目指したものだと言える。これに対して、第三項が実際にどのような形で経験されるのか、という認識論的な次元については、『ヘルメス』での言及はないとは言えないまでも希薄であるように思われる。これに対し、例えば、『ローマ』では都市における市民と第三項、あるいは『五感』では主体における感覚としての第三項が論じられることを通じて、第三項の認識論的な次元が開けることになる。よりそれが顕著に指摘されるのが『五感』における議論であって、主体に内在する第三項としての身体と感覚の認識が論じられることによって、第三項の認識論と超越論には、ずれが設けられていることを指摘することができるように思われる。というのも、セールはシステムの組成と持続に根源的に不可欠なものとしての第三項の存在を指摘するわけだが、一方でそれは常にシステムの側にとっては不必要なもの、邪魔なものという判断とともに排除されてしまうわけであるから、そこには第三項の超越論的あり方と認識論的なあり方のパラドクサルな両立が前提されていることになると考えられるのである。

その上で、本論文のさしあたっての目的は、「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的形成」における第三項概念をその思想の最初期における展開として確認するとともに、この概念の複層性を指摘することにある。結論から先に述べてしまうと、上記のずれが成立する以上は、第三項概念が超越的なものであるのと同時に経験的

なものでなくてはならない。そして、本論文の指摘としては、このことがすでに先の論文においては示されていると言えるのである。

3. 「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的形成」

この論文は、セールのあらゆる書籍の刊行に先んじて 1966 年に発表されたものだが、その内容は特に第三項概念をめぐるセールのその後の思想の展開を予告的に凝縮したものと言える。にもかかわらず、『ヘルメス』の最終巻である『北西航路』の刊行が終了する 1980 年までは、第三項の主題は、その思想の中に通底したテーマとして散見されつつも、表立って主題的に論じられることは少ないようにも見える。この第三項の問題が前景化しセールの思想の根幹をなす主題として展開される時期としては、1980 年の『パラジット』の刊行から 1993 年までの期間を区切る事ができるように思われる。とはいえ、このことと同時に、本論文が指摘しようとするのは、この概念が 1966 年初出のこの 6 頁ほどのごく短い論文の中ですでに非常に明確に定義されており、1980 年代に始まるその後の展開がすでに萌芽的に示されているという点である。

では、まず、第三項概念及びその排除に関して、セールが行なっている明確な定義を確認することにしよう。

> 「対話をすること、それは第三者を措定し、そしてこれを排除しようとすることである。成立したコミュニケーションとは、この排除された第三者のことなのだ。」[17]

言い換えれば、排除される第三者とはコミュニケーションの成立の必要条件となっている、ということができる。あるいは、コミュニケーションは二者が共にそれを妨害しようとする第三者を追放しようとする共闘である、と言い換えることもできよう。

3.1 コミュニケーションにおける第三項の妨害

しかし、これだけでは、議論はセールのコミュニケーション論における第三者の問題にとどまるようにも思われる。すなわち、コミュニケーションは二者間の問題なのではなく、常に三者間で起こっているものであり、なおかつ、それはその第三

者を排除することを成立条件として必要とする、というコミュニケーション論に立脚した視点のみからでは、後年の『五感』のみならず、準客体論や『ローマ』における共同体論までの広い範囲を射程におさめる概念としての第三項を捉え切るには十分でないように思われる。

その上で、指摘しておきたいのは、すでにこの「プラトンの対話篇とその抽象作用の相互主観的形成」の段階においてすでに、一見非常に明快に見えるこの第三者、あるいは第三項という概念が数多くの問題系の結節点をなしていることが示唆されている、という点である。

その上で、「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的形成」の論文を読む者を戸惑わせるのは、この論文がプラトンの対話篇における真理の問題と抽象数学におけるその誕生の問題とについて考察しているものとして仮定して進めるとき、コミュニケーションという点において本質的に似通った性質のものである、ということが論じられているように一見したところ感じられる。しかし、読み進めるにつれて、むしろ重点は、そこに避け難く付きまとうそのコミュニケーションの妨害物である第三項の問題に置かれていることが徐々に理解されてくるのである。この点において、やはりこの論文が当初は「第三者あるいは第三項排除について」というものであったことを念頭に置いておく必要があるように思われる。論点を先取りして述べてしまえば、問題となっているのは、コミュニケーションの問題でもなく、第三項の問題でもなく、両者の根源的で不可避的な結びつきにあると思われる。

セールはまず、コミュニケーションには本質的に雑音が不可避であることをエクリチュールの表意性に注目することを出発点に指摘しようとする。書かれたコミュニケーションとしてのエクリチュールに表意性を見出されることによって、セールはエクリチュールに図表(graphe)という次元を開こうとする。図表としてのエクリチュールには、線の震え、書き損じ、綴りの間違いなどの誤記（カコグラフィー）が必ず伴うのだが、セールはこの誤記を心理的な動機の表徴として読み取ろうとする筆相学的なアプローチを退ける。つまり、彼の目的は「誤記について純粋に、つまり不純なものについて純粋に語る」[18]ことにあるのである。

これはパロールにおいても同様であって、セールは、「吃音、連音の誤り、地域的な抑揚、発声障害、声音不良」についてもこれを病理的なものの兆候として読み取ることをしない。それどころか、これにコミュニケーションに伴う技術的手段におけるエラー、すなわち「バックグラウンド・ノイズ、ホワイト・ノイズ、混信、空電雑音」などとともに、セールはこれら「コミュニケーションを妨げる混信現象を全部まとめて、雑音と呼ぶ」とするのである。そして、先の引用は次のように続く。

「対話法[19]の最も深遠な問題は、同一種の変種もしくは変異に過ぎない他者の問題ではなく、第三者の問題なのである。この第三者のことを私はべつの場所では、雑音を擬人化して〈悪魔〉[20]と呼んだのであった。」[21]

セールにおける概念の用法について、ここからひとまず理解できるのであって、排除される第三者とは同一者ではなく、他者とは異なり[22]、また雑音あるいは〈悪魔(Démon)〉と同義である。さらに、この論文の原題が示しているように第三者は、第三項(tiers)とも言い換えられる。この論文では、基本的に、これらの問題系をめぐる概念を基本的には第三項とし、文脈に応じて言い換えることを試みることにする。そして、ここで確認されるのは、セールの第三項概念がその最初期にしてすでに多文脈的で多価的な性質のものであるということである。すでに言及したように、それは表意的なものでも、表音的なものでもあり、技術的なものでもあるとされた。また、セールはコミュニケーションとは、「コミュニケーションを破壊することに何らかの関心を抱いている諸個人を敵にして行う一種のゲーム」[23]であるとしているので、人格的なものであるとも言える。またここでは雑音あるいは〈悪魔〉と述べられることで、否定的な価値判断がこの概念には付随することもまた指摘しておきたい。また、最も排除されるべき第三項（le premier tiers à exclure）が前提しているのは間違いなく、排中律の問題である[24]。しかし、注意しておかなくてはならないことは、セールは排中律を「ソクラテスは死ぬ」という命題に対して、「ソクラテスは死ぬか死なないかのどちらかである」という論理命題としての文脈においてのみに必ずしも限っていない、ということである。それは後述するこの論文におけるセールの真理の問題とも関連するが、先取りしてしまうとすれば、セールが問題としているのは、観念的なものと経験的なものの接点だと言える。

3.2 間主観的な真理

セールはこのコミュニケーションと第三者排除の論理を哲学史上の哲学者たちに当てはめることを試みている。例えば、『形而上学省察』でのデカルトの試みは「第三者を追放するために同一者と協力すべき他者を求める」[25]ものである。ソクラテスの産婆法は問う人と答える人が協力して分娩という仕事を行う。そして、表題にもあるプラトンの対話法においては二人の対話者が「真理の出現というそのために二人が合意する目的を目指して、つまりコミュニケーションの成功のために共に戦っている」[26]とセールは述べる。つまり、ここにおいてはセールは真理とは成立し

たコミュニケーションであり、成功裏に終わった第三項の排除としているということになる。真理とは間主観的なものとして、プラトンの対話法に遡行することでとらえ直される。そしてセールは、コミュニケーションの失敗についても言及する。「アポリアに陥る対話の場合には、勝利は雑音という諸力の手の中にある」[27]というのである。これはセールのエピステモロジーの文脈における科学的真理が科学的対象と複数の科学者たちの相互牽制の中に構築されるもの、という論点と不可分なものとして理解されるべきであろうと思われる[28]。

3.3 数学におけるコミュニケーション

このように第三項が、つまり「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的形成」でのセールの問題提起の出発点に戻れば、雑音や誤記がコミュニケーションの成立の条件となっていることが確認されたことから、セールは、今度は論理の問題へとこの第三項を適用しようとする。そこで、セールは、論理記号とは一つの図表であり、それが複数回現れると数学者たちはそれを同一の記号だと「再認する」のだが、書かれた論理記号は往々にして先に述べたような線の震えやくせがあるということを彼らは「つまらないこと」として捉える、と指摘する。しかし、セールは、むしろエクリチュールにおいては、「形態を表す部分がそれで誤記の部分がどれかと問うてみると、雑音が、こう言ってよければ、もっぱら優位をおさめている」[29]と述べるのである。

> 「つまり、具体的な表記の様々な生起を通して、ある抽象的な存在を再認することと、この再認に関して同意することは同一不可分の行為なのである。言い換えると、誤記を除去する行為、つまり雑音を除去する試みは、抽象的な形態を理解するための条件であると同時にコミュニケーションが成功するための条件である。」[30]

つまり、ここで指摘されているのは、論理的な記号の再認の背後には、同時的に雑音の除去が条件として裏打ちされている、ということであり、さらにセールはこのような記号の伝達をコミュニケーションという関係の中に捉えることによって、論理の問題を関係論の中にそれを妨害する第三項が不可避的に含まれているという事実を呼び戻すのである。数学者が想定している世界はこの妨害物である第三項があらかじめ排除された特殊的なものである、というある種の転倒が指摘されることになる。なぜなら、記号は本来、常に、より圧倒的な雑音の中からそれを除去するこ

とと同時に成立するはずのものでなくてはならないからだ。

このようにして、セールは抽象数学における主体が「雑音を最大限に除去したコミュニケーションの国である理想的の共和国に住む〈われわれ〉」[31]であるということを看破するのである。

このことから、セールは数学の歴史性の背後に絶えざる第三項の干渉の存在を暴きだそうとしているということもできる。

> 「私が砂の上に正方形とその対角線を描くとき、震えていて、不規則で、不正確なこの図表のことを言いたいわけでは全くなく、それによって正方形とその対角線の理想的な形態を呼び出しているのである。つまり私は経験的なものを消し去り、推論を非物質化する。こうすることによって、私は一つの科学を可能にするが、それが目指すのは厳密性と真理だけではなく、普遍、即自的な普遍 L'Universel en soi である。こうすることにより、私は形態が隠しているもの、つまり、誤記、混信、雑音を取り除き、我々にとっての普遍 L'Universel pour nous の中で一つの科学を可能にする。」[32]

3.4 観念論と経験的なもの

このように述べることによって、セールは数学とは真理の構築を目指すことだけにあるのではなく、経験的なものを排除しようとする試みであるということを指摘することを逆説的に経験論と観念論が不可分のものであることを明らかにする。

> 「従って、対話におけるコミュニケーションを成功させようとする最初の努力はある形態をその経験的な表現から独立させようとする努力同型なのである。これらの表現は形態の第三者、混信、雑音であって、こういうものが絶えず干渉してくるからこそ、初期の対話はアポリアに陥るのである。」[33]

セールはこのようにして、プラトンを介することによって数学的な真理をコミュニケーションの問題と不可分なものとして結びつけつつ、そこに第三項を介入させることでその失敗を説明するのである。

とはいえ、セールは第三項の介在の不可避性を主張するのであるが、だからと言って、世界は本来的に雑音に満ちてあるという、観念論の失墜を言おうとしている

わけでは決してない、ということをここで指摘しておかなくてはならない。

> 「経験的なものを排除するとは、つまり同一者を覆い隠している他者の複数性、つまり差異化の働きを排除することである。これが数学化の、形式化の最初の運動である。〔中略〕経験論の極端な帰結においては、意味は雑音の中に全体的に浸されていて、コミュニケーションの空間は粒状になっており、対話に音声不良とならざるを得ない。」[34]

極端な経験主義はコミュニケーションを粒状（セールは相互に耳を傾け合うことも了解し合うこともないモナド、とも述べているが）[35]に分断する。経験的な極端な差異化の果てには、雑音だけの世界が残るのである。
従って、このような道筋をたどることによって、セールは数学が普遍的な純粋抽象のものではなく、対話という関係の中の歴史的な過程を通じて成立するものであることを指摘するのであって、また、その過程には経験論的なものが不可避的に介在しつつ、排除されるという運動が存在していることを看破するのである。

> 「してみると経験的なものは、厳密に言って、本質的かつ偶有的な雑音なのである。まず最初に排除すべき「第三の人間」、それは経験論者であり、最初に排除すべき第三項は経験的所与である。ところで、この悪魔は悪魔の中でも最強である。というのも、この悪魔が世界の支配者であることが理解されるためには、目を開き、耳を開くだけで十分だからである。したがって、対話を可能にするためには、シレーヌたちの歌や美に対して、目を閉ざし、耳に蓋をしなければならない。」[36]

注目しておきたいことは、セールが経験的なものをこのようにして「本質的かつ偶有的なもの」として観念論に接続していることであり、その際にその根幹に感覚を置いていることであろう。また、このような議論は、『ヘルメス』でのコミュニケーションとシステムの考察を経て、1980 年代に入り、『五感』の刊行において、主体における感覚と身体の問題を論じる際に、再び強調されるべきものとして浮かび上がってくることになるのである。

3.5 接点

再び、論点の展開をここで振り返ってみると、セールは、コミュニケーション一

般を再検討する上で、そこに雑音や誤記などの根源的な妨害物の存在があることを指摘した。そのことから、コミュニケーションの成立とは、すなわち、それを妨害する第三項の排除である、とされた。そこで、間主観的な真理への到達においては、常にそれを妨害する第三項を成功裏に排除することがその必要条件とされることが指摘されることになる。さらに、セールは、この論理を抽象数学の領域へと適用することによって、数学の初期段階においては、このようなコミュニケーションに付随する第三項の排除が不可避的に伴うことを明らかにすることで、抽象数学が普遍的な真理であろうとすることの背後に隠蔽している歴史性が暴き出そうとする。さらに、抽象数学が構築する世界がこのような本来的には避け難いものであるはずの第三項をあらかじめ排除された状態を特殊的に想定されたものとされるという転倒がなされることによって、抽象数学の世界が一般化される。従って、セールはコミュニケーション、あるいは間主観的な観念論の成立が実際にはなされていることを担保しつつも、観念論的な議論は、経験的なものの排除によって常に成立しているとすることで、観念論と経験的なものとが逆説的に不可分に接続していることを指摘するのである。経験的なものによって限りなく差異化されていく複数化の過程と、同一化を試みる観念論的な過程との拮抗の中に成立するものとして、セールは対話、あるいはコミュニケーションを考察しつつ、この道具立てによって最も普遍的で抽象的なものであるはずの数学を捉え直そうと試みるのである。従って、セールは観念論にも経験論にも与しない立場をとると言えるわけであるが、その根拠となるのは、抽象数学がそれでも依然として存在しているという一点にかかっていることを、セール自身が「数学の奇跡」[37]と述べていることからも理解できる。また、セールは「数学が存在しないとすれば、経験論がいつも正しいことになるであろう」[38]と述べてもいる。

その際に、排除し得ない「本質的かつ偶有的な」雑音として、感覚の存在が常に対話とコミュニケーションにつきまとうことが指摘されることになる。しかしながら、繰り返しになるが、重要なことは、コミュニケーションにおいては、あるいは対話においてはこのように第三項の排除が根源的なものであり、セールはそれを「物事の本性に刻み込まれているもの」[39]とまで述べるわけであるが、それらの重要性は実際には気付かれず、第三項は常に邪魔なものとして、余計なものとして、妨害するものとして排除される憂き目にあっている。つまり、第三項には、超越論上と認識論上とでは、ある種の食い違いが生じていると言える。このずれの本質を明らかにするためには、1980 年代に始まる著作における実際に経験される第三項の問題との対照研究が必要となるのであるが、それは今後の課題としたい。

4. 結論

本論文では、ミシェル・セールの第三項概念及びその排除の問題について、セールの最初期の論文である「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的生成」の読解を通じて検討することを試みた。そこでは、第三項概念の排除がコミュニケーションの必要条件になっているというコミュニケーション論の観点から抽象数学を読み直すことによって、観念論と経験的なものとの逆説的な接点の存在を明らかにすることであった。また、そこでは副次的で余剰の妨害物となされていた雑音や誤記などのコミュニケーションでの妨害物、あるいは感覚与件は否定的な立場に追いやられながらも実は、対話の成立の本質的に寄与するものである、ということが指摘しうると言える。

---

[1] Michel Serres, *Le Parasite*, Paris, Grasset, 1980.
[2] Michel Serres, *Rome. Le livre des fondations*, Paris, Grasset, 1983.
[3] Michel Serres, *Les cinq sens*, Paris, Grasset, 1985.
[4] Michel Serres, *Hermès I, La communication*, Paris, Minuit, 1969.
[5] Michel Serres, Le dialogue platonicien et la genèse intersubjective de l'abstraction, *La communication, op.cit.,* pp.39-46. なお、『エピステーメー』第 2 巻 10 号（朝日出版社 1976 年）所収、小林康夫訳「プラトンの対話と抽象化の間主観的な発生」と『コミュニケーション』（法政大学出版局 1985 年）豊田彰・青木研二訳「プラトンの対話篇と抽象作用の相互主観的生成」の二つの邦訳が出ている。
[6]例えば、『コミュニケーション』内でも最も有名な論文の一つである「構造と輸入－数学から神話へ（« Structure et importation : des mathématiques aux mythes »)」は、初出である 1967 年の *Revue Philosophique de la France et de l'Etranger* では「象徴分析と構造的方法（« Analyse symbolique et méthode structurale »)」という題名で発表され、また『コミュニケーション』の巻頭に納められた論文である「コミュニケーションの網の目－ペネロペ(« Le réseau de communication : Pénélope »)」は同雑誌 1966 年に発表されたが、その際は「ペネロペ、あるいは理論的な図表 (« Pénélope ou d'un graphe théorique »)」と題されていた。Michel Serres, Analyse symbolique et méthode structurale, *Revue Philosophique de la France et de l'Etranger*, tome 157, Paris, P.U.F., 1967, pp.437-452, Michel Serres, Pénélope ou d'un graphe théorique, *Revue Philosophique de la France et de l'Etranger,* tome156, Paris, P.U.F.,1966, pp.41-51. Michel Serres, Pénélope ou d'un graphe théorique, *Revue Philosophique de la France et de l'Etranger,* tome156, Paris, P.U.F.,1966, pp.41-51.
[7] Michel Serres, Le troisième homme ou le tiers exclu, *Les études philosophiques : Nouvelle série,* tome 24, vol.4., Paris, P.U.F., 1966, pp.463-469. 内容に関していえば、この初出の論文と Minuit 版で改稿された箇所はない。
[8] 『コミュニケーション』では各論文の巻末にそれぞれ日付が付してあり、それが

実際の論文の出版年とは異なることから、この日付は発表を示すものではなく執筆を示すものであると推察される。(例えば『コミュニケーション』の中で最も古い日付が付されている「構造と輸入」は 1961 年 10 月とされているが、実際に *Revue Philosophique de la France et de l'Etranger* に論文が掲載されたのは 1967 年である。豊田彰と青木研二は『コミュニケーション』の解説で、これを発表年の記載の誤りだと述べているが、『コミュニケーション』所収の他の論文の日付を比較したところ、いずれにおいても雑誌の刊行年との一致が見られないので、この日付は執筆の日付を示していると考える方が妥当ではないかと思われる。) だとすると、1961 年から 1968 年にわたって執筆されたことになる『コミュニケーション』の中で、執筆年が 1966 年 10 月となっているこの「プラトンの対話篇」は『コミュニケーション』内では比較的後期に執筆されたものだと言える。

[9] ブラウンは、寄食者の概念について主に社会学的な文脈で複数の論文を発表しているが、その中ではネオリベラリズム批判的な観点から第三項である寄食者の包摂について論じており、興味深い。Brown, S.D. (2013) In praise of the parasite: the dark organizational theory of Michel Serres. *Informática na educação: teoria e prática*, 16(1), Porto Alegre,UFRGS, Centro Interdisciplinar de Novas Tecnologias na Educação, Programa de Pós-Graduação em Informática na Educação, pp.83-100.

[10] Josué V. Harari and David F. Bell, Journal à plusieurs voies, *Hermes : Litterature, Science,Philosophy*, Baltimore, John Hopkins U.P., 1982, pp.ix-xl.

[11] *Ibid.*, p.xxiv.

[12] idem

[13] *Ibid.*, p.xxvi.

[14] idem

[15] *Ibid.*,p.xxxvii(傍点は原著者による).

[16] idem

[17] *La communication, op.cit.*, p.41(傍点は原著者による).

[18] *Ibid.,* p.40.

[19]原文では le problème dialectique le plus profond となっており、青木研二訳では「弁証法の最も深遠な問題」となっているが、この dialectique が果たしてどの弁証法を指しているのかと言えば、『コミュニケーション』におけるこの論文の表題が示している通り、プラトンにおける dialectique だと考えるのが最も適切であろうと考えられる（事実、続く p.42 では la dialectique platonicienne プラトン的弁証法という言葉が実際に用いられている)。したがって、ここでセールが問題としているのは、いわゆる弁証法の批判であるというよりは、プラトンにおける対話法による相互主観的な抽象的概念の理解の獲得の問題であろう。だとすれば、ここでは dialectique は対話法と訳する（もしくはディアレクティケーと訳する）ことがより適切であろうと思われる。とは言え、このコミュニケーション論及び第三項論は、セールにおける方法論としての弁証法批判と不可分であることについては、注意しておく必要がある。

[20] このセールにおける〈悪魔〉に関して、ここで述べられている「べつの場所」とはおそらく、『コミュニケーション』とほぼ時を同じくして執筆が行われた『ヘルメス』第２巻『干渉』の中の、特に第２章「客観的な干渉」のことを指していると思われる。セールの妨害者としての〈悪魔〉は、ソクラテスのダイモーンから出発し、デカルトの〈悪しき霊(Malin Génie)〉経由し、また物理学者マクスウェルにおける〈悪魔〉に由来しているものと思われる。Cf. Michel Serres, *Hermès Ⅱ,*

L'interférence, Paris, Minuit, 1972, p.90-91.
[21] *La communication, op.cit.,* p.40.
[22]第三者論という言葉とともに最も一般的に想起されるのはレヴィナスの『全体性と無限』を中心として言及されている第三者論及び、それを受けたデリダの第三者論ではないだろうか。しかし、他者をめぐる倫理をめぐる議論として展開されるレヴィナスの第三者論に対して、セールにおける議論は、いわば超越論的哲学をも射程に入れたより包括的で一般的な方法論の道具立てとして用いられている点において差異化しうるものと考えられる。
[23] *La communication, op.cit.,* p.41.
[24] *Le système de Leibniz* においてはセールはすでに論理的であるということは、排除的であるということを意味しない、と述べている。「論理的なのは、従って、排除的で教条的であるからだということになるのだろうか？というのもどこに行こうとも第三項は常に排除されているのだから。〔中略〕第三項が際限なく許容されてしまうようなライプニッツの哲学は冴えない折衷主義に陥るのだろうか？」(*Le système de Leibniz et ses modèles mathématiques,* Paris, P.U.F., 1968, p.598, note(1).)
[25] *La communication, op.cit.,* p.41.
[26] *Ibid.,*p.42.
[27] idem
[28] この点については、例えば *Le contrat naturel*, Paris, Bourin, 1990,p.42 などを参照。
[29] *La communication, op.cit.,* p.43.
[30] idem(傍点は原著者による)
[31] idem
[32] *Ibid.,* p.44(傍点は原著者による).
[33] idem(傍点は原著者による)
[34] idem
[35] *Ibid.,*p.44,note 9.
[36] *Ibid,* p.45(傍点は原著者による).
[37] idem(傍点は原著者による)
[38] *Ibid.*, p.45, note10(傍点は原著者による).
[39] idem « elle est inscrite dans la nature des choses ».